

第二十一課

あなたがたがわたしにとどまるなら

包括的条件

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことはあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。」

(ヨハネ一五・七)

神と私たちとの交わりにおいては、いかなる場合でも、約束とその条件は分けることはできません。私たちが条件を満たせば、神は約束を満たしてください。神が私たちにとってどういふお方になるかは、私たちが神に対してどういふ者になるかにかかっています。「神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。」祈りにおいても、「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい」には、「あなたがたがわたしにとどまるなら」という、単純な、また当然の条件がついています。神がいつも祈りを聞かれるのは、キリストによります。私たちは、キリストにあって初めて、神に至ることができます。キリストにあることが、祈りが聞かれ

る道です。キリストのうちに完全にとどまることによって、自分のほしいものを求める権利と、それがかなえられる約束を与えられます。

この約束をほとんどの信徒の経験と比較してみると、あまりのへだたりに驚かされます。ささげられながら何の答もない祈りがどれほどあるか、だれも数えることができないほどです。原因は、私たちが条件を満たさなかったか、それとも神が約束を満たされなかったかのどちらかです。信徒はこのどちらとも認めようとしません。そして、そのジレンマからのがれる道を考え出してきました。彼らは、約束に、「みこころならば」という条件文を付け加えました。しかし、救い主はそのようには言われなかったのです。彼らは、神と自分たちの威信を保とうとしたのです。みことば通りに受け入れ、しっかりと握り、真理の正しさを証明してくださるキリストに信頼すれば、神の御霊は彼らを導いて、主が、みことば通りにこの約束を適用してくださることを悟らせてくださいます。主は、キリストにとどまるという条件を果さなかったことが答のない祈りの十分な説明となっていることを告白させます。その後、聖霊は、祈りにおける私たちの弱さを変えて最も力のある動機とし、キリストにあることの秘訣を悟らせ、その恵みを得させるように、私たちを励ましてくださるのです。

「あなたがたがわたしにとどまるなら。」信徒は、主イエス・キリストの恵みと知識とに成長するに従って、神のみことばの、新しい、また深い意味を知って驚きます。神のみことばが開かれ、

その中で見出した祝福に喜んだことを思い出すことがあります。ところが、しばらくして、もっと深い経験を積んで、新しい意味が分ってきます。そんな意味がそこにあったのか、と思うほどです。ところが、クリスチャンとしての生活がもっと成長すると、その同じみことばがふたたび奥義となり、聖霊は、その人を神の満たしへと更に深く導かれます。このように、一步一步神のいのちの完全さを教えてくれる、常に成長させ、決して尽きることのないみことばの一つが、「わたしにとどまりなさい」という尊い主のみことばです。枝が木につながっていれば、いつも生長し大きくなります。同じように、私たちがキリストのうちにとどまるということは、神のいのちが私たちをより十分に、また完全にとりこにするいのちの過程なのです。若く、弱い信徒は、自分の光の計りに従って、キリストのうちにとどまるでしょう。しかし、そのような人が、主が理解された意味で主のうちにとどまるようになり、それにかかわるすべての約束を受け継ぎます。

キリストのうちにとどまりつつ成長する生活の第一段階は、信仰です。自分がいかに弱くとも、その命令は確かに自分に語られたものであると悟る時、その大目標は、自分がキリストのうちにあることを知っているのですから、不忠実さや失敗があつたにしても、キリストのうちにとどまることを当面の義務であり手のとどく祝福であると単純に信じることにあります。そのような人は、とりわけ救い主の愛と力と忠実さに満たされており、自分が必要としているのは、信じることであると感じています。

間もなく、自分はそれ以上のものを必要としていると感じるようになります。信仰には従順が伴わなければなりません。すでにある信仰に従順が加えられなければならないというのではありません。信仰が従順として現れてこなければいけないのです。信仰は本来従順であり、主にならうものです。従順は、主のみこころを実行する信仰です。信者は主にとどまることの特権や恵みなどを多く思つて、その本分や結果などあまり思わないものです。気づかずに見のがしてきた自己や自意識が心の多くを占めているために、若く弱い信者は、信仰によって受くべき平安を失うのです。主にとどまるという恵みは、実際の従順の中で保たれなければなりません。「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。」前には、その大目標は、知的に悟り得た真理によつて、キリストとその約束とに心を置くことでした。しかし今の信仰の段階におけるおこなふ努力は、自分の意志を主のみこころに結びつけることであり、心といのちを完全に主の御支配のもとに置くことです。

しかし、それでもなお何か足りない気がします。意志も心もキリストのみそばにあり、主に従ひ主を愛しています。しかし、まだ、なぜか肉の力が強く働き、起るべきはずではない生れつきの自然の行動や感情が内心から起ってきます。意志はそれを認めたり、許したりはしないのですが、そこは、意志の力の及ばない領域なのです。罰せられるようなはつきりした罪はなくても、なぜ、きよめの美しさや愛の熱心さや、イエスとその死を自分の身に負うということに欠けたり

不足したりするのでしょうか。主は、イエスとその死において、私たちのいのちが失われ、主のうちにとどまることができると言われたのではないでしょう。キリストのうちにとどまり、キリストが私たちのうちにとどまるという経験はまだ十分にしていけないからではないでしょうか。

そうだとしたら、信仰と従順こそ、祝福への道です。イエスは、ぶどうの木とその枝のたとえ話をする前に、信仰と従順が導く完全な祝福とは何かをはっきりとお教えになりました。三回以上も次のように語っておられます。「もしあなたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずですよ。」イエスはまた、そのような従順な愛の冠として三重の祝福をお語りになりました。聖霊が御父のもとからくだること、御子が御自身を明らかにすること、御父と御子が弟子たちのうちに住んでくださることです。私たちの信仰が成長して従順になり、その従順と愛の中に自らの全存在が注ぎ出され、またキリストに完全に結びつく時、私たちの内的生活が開発され、キリスト及び御父との明確で意識的な結合としての、栄化されたイエスのいのちと御霊を受ける能力が形づくられます。そして、次のみことばは私たちの中に成就されます。「その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。」キリストが神におり、神がキリストにおられることは、意志や愛が一つであるというだけでなく、性質もいのちも一つであるということです。両者がそれぞれのうちに存在し合うからです。私たちがキリストにおり、キリストが私たちのうちにおられるの

は、意志と愛が一つになるだけではなく、いのちと性質においても一つになるのです。

イエスは御父のうちにわれ、私たちはイエスのうちにおり、イエスは私たちのうちにわれ
ます。イエスは聖霊によって私たちのことを以上のように語って後、こう言われました。「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたのうちにとどまります。わたし自身とのいのちの結合を受け入れ、それを認めなさい。そうすれば、あなたがわたしにとどまるように、わたしもあなたにとどまります。わたしが父にとどまっているように。それは、あなたのいのちがわたしのもの、わたしのいのちがあなたのものになるためです。」これこそ、たましいが自己を捨て、キリストに正しい位置を占めていただき、私たちのいのちとなっていたとどまり方です。それは、何の心配もなしに、自分のためにあらゆることをしてくれた愛を信頼し、服従することに幸せを見出す幼子にふさわしいものです。

このように主にある者にとって、「何でもほしいものを求めなさい」という約束は、当然受け継ぐべきものです。それ以外には考えられません。キリストは、そのような人々を、完全に御自分のものとなさっておいになります。キリストは、そのような人々の愛と意志と生活の中に生きていてくださいます。その人々の意志が放棄されるだけではありません。聖霊によって、キリストがその人々の意志の中に入り、住み、息づいてくださいます。御父が常に聞いてくださる主が、その人々の中で祈ってくださるので、その求めはかなえられます。

愛する同信の皆さん。教会が、背信と世俗化と異教化の現状の前に、このように無能になつてゐるのは、キリストが望まれるように、私たちがキリストのうちにとどまっていけないからだといふことを告白しましょう。キリストは、背信と世俗化と異教化のただ中で、教会を征服者以上のものにするのがおできになります。キリストは、約束なされたことを必ずお守りになると信じようではありませんか。そして、その告白がもたらす罪の宣告を受け入れましょう。

しかし、落胆をすることはやめましょう。枝はぶどうの木にとどまっていれば、生長が止ることはありません。主がお望みになるようなとどまり方は、私たちの手の届くところにあります。主が私たちのうちに住んでそれを可能にしてください。すべてを損と考える勇氣を持つて、こう言いましょう。「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。」とどまることにとられすぎて、キリストを忘れないようにしましょう。とどまることは、私たちをキリストとその完全さにあずからせることだからです。キリスト全体、その従順と謙遜、摯拳と力を求めましょう。私たちのたましいは、キリストのうちに動き、行動するからです。キリスト御自身が、私たちのうちに約束を成就してください。

次に、私たちは、主にとどまるという恵みに成長していくに従つて、自分の意志を神の意志の中に投入するという権利を行使するようにしましょう。その意志が命じるところに従つて、約束

は成就すると宣言しましょう。各人の成長とその計りに従って、祈りの中で、これが神のみこころだと言えるものを私たちに示していただけるように、聖書の教えに従いましょう。「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」とイエスが言われた時与えてくださったものを、個人的に体験しないで満足することがないようにしましょう。

愛する主よ。この約束を全く単純に、しかも新たな気持で受け入れさせてください。また、あなたが与えくださる聖い賜物の唯一の計りは、私たちの聖い求めであることを教えてください。主よ。この約束を私たちのたましいの中で、生きたもの、力強いものとならせてください。あなたは、「わたしにとどまりなさい」とおっしゃいました。私の主、私のいのち、私のすべてであるお方よ。私は何とかしてあなたのうちにとどまります。あなたの完全さに向かって成長できるように、あなた御自身を私にください。それは、あなたにすがりつく信仰の努力でもなく、私を守っていただくためあなたにお頼りする信仰の休息でもありません。意志の服従でも、戒めの厳守でもありません。私を満足させるものは、あなた御自身が御父のうちにおられるように、私のうちにも生きてくださることです。私の主よ。あなた御自身です。しかも、私の前にも、

私の上にもなく、私と一つとなって私のうちにとどまってくださる事です。私には、これが必要です。私はこれを求めております、どうかお願いします。

あなたは、「ほしいものは何でも」と言われました。完全に、深く主にとどまる生活は、意志を新たにし、きよめ、強めるので、私は大きなことを求める光と自由を与えられます。主よ。あなたの死の中に死に、あなたのいのちの中に生きる私の意志が願う時、大胆で、力強いものとならせてください。

あなたは、「それがかなえられる」と言われました。アーメンである方、忠実であり、真の証し人である方よ。あなたが、このみことばをこれまで以上にすばらしく真実なものにしてくださいという、喜びにあふれた確信を与えてください。神を愛する者たちのために神が用意して下さったものを与える余裕が、まだ人々の心にはないからです。アーメン。

注

祈りについての本や説教と、主の教えの中に見出すものとを注意深く比較検討してみると、一つの大きな違いがあることが分ります。祈りの答を重要視するという点で、両者は決定的に違います。前者では次のことが強調されます。私たちは、祈りの答がなくても、祈りなしには満足できないこと、そのゆえに霊的訓練としての祈りの祝福があるということです。神の知恵だけが最善のものを御存知です。神は、手控えておい

でなるもの以上をお与えになるかもしれないということです。このような教えが、たといどのようなように高尚に見え、靈的に見えたとしても、それが主の教えと全くかわりのないものであることは明らかです。祈りについて主が言われたことを注意深く集めれば集めるほど、主が祈りを率直に目標のある手段としてお考えになつてゐること、答は、私たちないし私たちの祈りが天の御父に受け入れられてゐることの証拠であることが明らかになります。そうだからといって、キリストが、御父の交わりや恵みよりも、賜物の価値の方を重視しておられるわけではありません。決してそうではないのです。むしろ、御父は、答が御父の恵みと、御父と私たちとの交わりのしるしだと言われているのです。「きょう、このしもべは、私があなたのご好意にあずかっていることがわかりました。王さまはこのしもべの願いを聞き入れてくださったからです。」

毎日祈りが答えられる生活は、靈的成熟のしるしです。すなわち、私たちは、まさにキリストのうちにとどまることに成功しました、私たちの意志は、本当に神の意志と一つになりました、私たちの信仰は、神が私たちのために備えてくださったものを見ることができ、まるでに力強く成長しました、キリストの御名と御性質が完全に私たちをとりこにしました、私たちは、神がみこころを明らかになさる者たちの仲間入りができるようになりました、ということなのです。神はこのような者たちの祈りに答えて世界を治められます。

このような人々には、当初の人間の威厳が回復され、キリストのうちにとどまる時、勝利者であるとりなし手としてのキリストの力が現され、御名の栄光が輝き出ます。祈りは祝されたものとなり、答は更に祝されたものとなります。私たちの祈りと信仰と意志は、御父からの報いとして神が望まれた通りのものとなります。

このようなことを書いたのは、キリストが祈りについて言われたことを集め、祈りのあるべき姿、いや、むしろ私たちがキリストにとどまり本来あるべき姿になるなら、祈りの答は期待できるといふことを知って

ほしいからなのです。それは答えられない祈りで自分を慰める^{とや}岩から自分を解放してくれます。それは、キリストがお定めになった教会の地位を発見させてくれるものです。教会は、ほとんどその地位を占めたことがあります。それは、私たちが、キリストの御名によって大胆に祈ることを知らないために起る、私たちの恐るべき霊的弱さを明らかにするものです。それは、私たちが、効果的な祈りの秘訣として完全にキリストと結びつき、御霊に満たされた生活を送るようになることを勧めます。それはまた、私たちを次のみことばへと導くものです。「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。」真実に、また霊的にイエスと結びついた祈りは、いつも答えられるものです。